

解説



【船】この長唄の題名は「ふなぞろえ」なのか「ふなぞろい」なのか、あるいは、「ふなぞろえ」なのだろうか。前の二つは送り仮名の新しいので、現代風なら「ふなぞろえ」となる。船が揺られて浮んでいる様子を描いている。後の一つは「ふなぞろえ」であるから、何らかの意思を持って描かれている。という意味の名詞である。

ここでは、船捕という言葉自体が戦の用語であるから「そろえ」とした。例えば、騎馬軍団を組織し、関兵して鼓舞するとき「馬揃え」と言うからである。その戦用語を緩和するために、別名では「風流」を付してあるのである。何れにせよ軍馬を集めること、隅田川に船が集まっている様を描いた長唄の歌題と云うことになる。

【作詞者】世に作家や若人に号を名乗る人は多い。作家の二葉亭四迷、落語家の三遊亭円楽が如きであるが、この磯月亭という人は不詳なものである。筆者であれば「比呂 幻亭」となるのである。通称は「比呂さん」であるが、「幻想小説クラブ」一門の書生という風を感じた。

【船の始まり】船捕の長唄であるから、そもそも「船」とはなんぞや、という説明から始まっている。船は、中国の皇帝の臣下であった貸状という人が考案したと云うのである。この皇帝は古代中国で最初の漢民族の皇帝となったとされる伝説上の人物で、黄帝と尊称されていて名前が「姪 軒轅」である。

【網曳く船】この網は、「投げ網」ではない。投げ網は、引いてはいけない。船から投げ網を打つ場合もあるが、普通は、投げ網は陸から投げ、手繰り寄せて魚を捕る。

【網曳く船】この網は、「投げ網」ではない。投げ網は、引いてはいけない。船から投げ網を打つ場合もあるが、普通は、投げ網は陸から投げ、手繰り寄せて魚を捕る。

川中に、網曳く船は河岸近くに居るわけである。さもなくば船は川中で衝突してしまふし、川を上り、また下って、船が交差することは出来ない。

引き網漁は現在でも茨城の霞が浦で行われている。目の細い網を漁場に入れ、船で引いて白魚を捕る。また、少し細目の大きい網を入れてワカサギを捕る。いづれも水中に入れた網を船で曳き、魚が入った頃合いを見て網をたぐり寄せて網の中の魚を船に上げるのである。隅田川でも恐らく同じ漁法が採られたに違いない。

四手網とは、網を四隅に竹で対角線状に張りつけ、水底に沈めて魚が入った頃合いに引き上げて漁をするのだが、四角い網は対角線と交わる点を支点として太竹に結び、竹の端は水底を河岸か、あるいは川中に挿し立てた杭に固定して上下させる。頃は、曳いているのである。杭などには固定せず直接に四手網を川底に沈め、漁師は舟に身を置いているのである。

あるいは太竹の端を川底に置き、時々引き抜いて漁場を変えるのである。この漁場を変える様、あるいは川の流れに任せて船から四手網を川底に流す様が「曳く」という動作を表しているのである。

筆者は隅田川の水深を知らぬが、四手網の太竹支柱を川底に挿すのなら、水深は二、三メートル程度まで、四手網を網で結び、船上から下ろす場合なら三、四メートル程度と思われる。それ以上の水深では水流の力で、重くて四手網は動かせない。高流がある場合には網中には小石を入れて早く沈むようにする。流れが緩やかか、沼や堀の場合には、網自体の重さで、網が魚が生息する水底に沈んでくれるので小石などは入れない。

漁師は一体、何を捕るのであるか。隅田川は大川である。しかるに、漁船と渡し船などが同時に浮んでいるのであるから、人や荷物を乗せた船は

【猪牙舟足】猪牙舟は、川の舟の一種で、猪の歯のように上向きに尖っていたのでその名がつけられたと云う。港に停泊する廻船の乗組員や乗客に飲食物を売りに来る小舟を「茶舟」と云うが、猪牙舟は形状的にはその一種である。茶舟はチロチロと船々を回って飲食物を売り巡るので、「ちよる船」と言われていたようで、猪牙舟の別名でもある。船の大きさは、全長三十尺で、船形の半分は長く、中は四尺半である。

猪牙舟は前方が細く狭られていて水を切って進むのでスピードが速く、船頭は普通は一人である。人力エンジンの櫓で漕ぐのだが、二挺の櫓を付けた猪牙舟もあり、「二挺仕立」と云った。隅田川では、吉原に通う客が客は二人程度が乗る高速水上タクシーである。隅田川では、吉原に通う客が多く使ったので、猪牙舟と言えは、この遊客を乗せて通う船のことを指す。しかし、櫓を漕ぐと揺れて、乗りにくい船であったようである。

筑波山の畔に降りた猪牙舟は、積りつってゆけば岸から流れ落ちて男女用になるように、最初は貴女に対する小さな恋であったけれど、私の恋は積もり積もって、今では淵のような深い恋となりました。

【御】隅田川に、渡船という橋が架かっている。元禄時代から「御殿の渡し」があった所で、花見の船がよく保護事故を起こして人が死ぬので「三途の渡し」と呼ばれる。花見の船がよく保護事故を起こして人が死ぬので「三途の渡し」と呼ばれる。

【悪の閑屋】閑所の番人がいる小屋を閑屋と云う。向島の竹屋の付近は桜の名所だったから、花見の時期は大変な人出であったらう。そして、竹屋も繁盛していたので、折角の閑屋に言えは特設駐車場であり、庶民の建物ではなかった。

【二挺三味線】三味線に何個かの小鼓を打ち合わせる合奏のことを指す。屋形船で芸者が唄い、奏するのは、恐らくそれだけではなく、大小の太鼓や笛や鐘などの「鳴り物」もあつたであらう。ドンドンひやら、ドンドンひやら、と賑やかな屋形船が遊び客を乗せて流れて来る様子が唄われている。

【様はさんやの】様はさんやの三日月様、宵にちらりと見たばかり

【後年、明治には】後年、明治には、砂利船ともいわれ、羽田にある船大工の平林作蔵氏が造つた模型には、次のような註釈がある。「近代都市を作るには多くの砂利が必要だった。多摩川でも明治初めから昭和の初めにかけて盛んにされて、それを運搬するために船が使われた。それが砂利船である。船が砂利船で、船の大きさは、全長三十尺で、船形の半分は長く、中は四尺半である。そこで積み替えられた。最初は道路舗装として主に使われたがコンクリートが使われるようになる、あらゆる土木建築工事に使われてきた」と

【竹屋の渡し】この渡しは、待乳山聖天のふもとにあって、待乳の渡しとも呼ばれた。また、山谷堀から向島の三田神社の馬居前までを結んでいたこともあって、「向島の渡し」とも呼ばれた。その、神社側の渡し場の近くに「竹屋」という船宿の茶屋があつた。茶屋の女将はベッピンさんであつたかどうかは知らぬが、ともかく美しい声で、対岸の山谷堀に渡つた自店の船、あるいは対岸に浮かぶ猪牙舟の水上がりを見守り、竹屋の客を渡すために「たけやう」と呼び戻していた。これが遊客達の評判になつて、「竹屋の渡し」と云うのである。

【吹けよ川風、あがれよ、波、中の芸者の顔みたく、個々といひで押せば、汐が逆こりて橋が立たぬ】吹けよ川風、あがれよ、波、中の芸者の顔みたく、個々といひで押せば、汐が逆こりて橋が立たぬ

【悪の閑屋】閑所の番人がいる小屋を閑屋と云う。向島の竹屋の付近は桜の名所だったから、花見の時期は大変な人出であったらう。そして、竹屋も繁盛していたので、折角の閑屋に言えは特設駐車場であり、庶民の建物ではなかった。

【二挺三味線】三味線に何個かの小鼓を打ち合わせる合奏のことを指す。屋形船で芸者が唄い、奏するのは、恐らくそれだけではなく、大小の太鼓や笛や鐘などの「鳴り物」もあつたであらう。ドンドンひやら、ドンドンひやら、と賑やかな屋形船が遊び客を乗せて流れて来る様子が唄われている。

【悪の閑屋】閑所の番人がいる小屋を閑屋と云う。向島の竹屋の付近は桜の名所だったから、花見の時期は大変な人出であったらう。そして、竹屋も繁盛していたので、折角の閑屋に言えは特設駐車場であり、庶民の建物ではなかった。

【二挺三味線】三味線に何個かの小鼓を打ち合わせる合奏のことを指す。屋形船で芸者が唄い、奏するのは、恐らくそれだけではなく、大小の太鼓や笛や鐘などの「鳴り物」もあつたであらう。ドンドンひやら、ドンドンひやら、と賑やかな屋形船が遊び客を乗せて流れて来る様子が唄われている。

【悪の閑屋】閑所の番人がいる小屋を閑屋と云う。向島の竹屋の付近は桜の名所だったから、花見の時期は大変な人出であったらう。そして、竹屋も繁盛していたので、折角の閑屋に言えは特設駐車場であり、庶民の建物ではなかった。

